伊藤　優梨（いとう ゆり）　第一小　6年生

作品名：「ひいおじいちゃんごめんね」

図　書：オオカミ族の少年

　オオカミ族の少年はクロニカル千古の闇シリーズの一巻目です。主人公のトラクはオオカミ族の少年です。トラクは、お父さんをすでに亡くしています。なぜか。トラクのお父さんは気の狂った大きいクマになぐられたりして死んでしまったからなのです。お父さんが死んですぐ、トラクは子供のオオカミ「ウルフ」に出会います。「ウルフ」とトラクは仲良くなり、「ウルフ」は案内人となります。二人は、大きなクマに宿る悪霊を亡くし、世界を救うために精霊の山へ出発します。

　私がなぜこの本を選んだか。それは、トラクと私に通い合う部分があったからだと思います。私は今年の十一月にひいおじいちゃんが亡くなりました。その同じ年の夏休みに私はふとひいおじいちゃんの事をおばあちゃんの家で思い出しました。ホームに居るひいおじいちゃんを。その事を誰かに言えば良かったのに私は何も言いませんでした。なぜ私は誰にも言わなかったんだろう。ひいおじいちゃんが亡くなってからとても考えました。あの日がひいおじいちゃんに会える最後の日だったのに。今ではとてもこうかいしています。その「こうかいしている」部分が私とトラクの通い合う部分ではないかと私は思います。トラクは、お父さんが死ぬ前に嫌な予感を感じていました。それなのに、トラクはあまり周りの事を見ないではしゃいでいました。それだから、くまが近づいてきた事にも気づかずに、最終的には、トラクを守ったお父さんが殺されてしまったのだと思います。「もっと周りを見ておけば良かった」とか、「お父さんともっと話しておけば良かった」とか。色々な事を考えたと思います。トラクの気持ちは私には良くわかります。私も「ひいおじいちゃんともっと話しておけば良かった」とか、「ひいおじいちゃんにもっと会いにいけば良かった」とか色々思いました。

　この本を読んで、私はトラクの気持ちが痛いほど良くわかりました。私には、お父さんはいます。だけどトラクはたった一人の家族のお父さんを亡くしてしまいました。だけど私もひいおじいちゃんを亡くしてしまいました。たった一人の家族ではないけれど、亡くなってしまったひいおじいちゃんに会いたい…。今は、そういう思いでいっぱいです。最後にひいおじいちゃんに一言。

「ひいおじいちゃん、会いに行けなくてごめんね。そして今までありがとう。天国で幸せにね。」と、いうメッセージを送ります。

　そしてトラクにも一言。

「これからも、悲しいと思うけど、頑張ってね。」